

城下町の水害の危機管理について

矢野 司 郎*

摘要

近世城下町の建設と維持はかつてない規模で地域社会の景観を一変させる歴史的事業であった。その前時代の中世城郭と近世城郭の最も異なる視点は、近世城郭がその城下と一体で設計され、武家地・町人町・寺町というゾーニングが施されことである。そして譜代大名が入封した城下町であれば石高の異なる大名が同一の城下町に複数入封したことである。前提として、その城下町に幕藩体制の中で数々の大名が入封してくるということは、石高の規模が異なるどの大名にも使い勝手の良い街路網が整備され、上水・下水の確保などのインフラの整備が必要であったことを意味する。しかしながら、なにをにおいても軍事優先・領国の中心性が優先であったために、自然災害にはもろい側面をもっていた。本稿では、三河国拳母を事例として、陣屋から城郭への昇格をきっかけとし、自然災害のために改変、城郭の移転などをやむなくされた近世城下町について考察する。拳母は矢作川の城下の東部を流れ、そのため再々の洪水に見まわれていた。寛延2(1749)年、城持ち大名内藤氏の拳母への入封とともに洪水を要因として城郭および侍屋敷地区は地勢が低い町屋の隣接地から0.8km 西南西の童子山に移転した。その際、三宅氏の陣屋町時代の町屋や部分も一部城下に接続する樹木台に移転することになった。

キーワード：近世城下町、転封、河道の変更、自然災害、城下町の改変、城郭移転、拳母

I はじめに

近世の基本的都市といえる城下町はすでに多くの識者によって研究がなされてきた。歴史地理学においても、藤岡¹⁾、西村²⁾、矢守³⁾などが地理的な手法を駆使して数々の論文を発表してきた。近年は城下町ブームを受けて、おびただしい数の著作が出版されている。もちろん単に流行にのるために研究がなされているわけではなく、特に都市的集落の研究に関連する分野では近世城下町の研究が不可欠な要素であることに起因する。その中で歴史地理学的な研究はもとより、民俗学、建築や土木などと関連して学際的な側面をもつ研究領域である。そのなかで足利⁴⁾や金田⁵⁾の研究は他分野においても大きな影響を与える存在である。

もとより、阪神・淡路大震災(1995年1月17日)や東日本大震災(2011年3月11日)、能登半島地震(2024年1月1日)や頻発する水害によってなどの震災、頻発する水害によって、災害への関心はいやおうにもなく高まりをみせるようになっている。本稿が対象とする近世においても、歴史学者の藤田(2021)のように災害に対する関心は高まりを見せており⁶⁾、そこには従

*大阪国際中学校高等学校非常勤講師 E-mail: hungry602@icloud.com

来の狭い時代や分野にとらわれない姿勢をみることができる。本稿でも防災や減災について、このような高まりをみせる自然災害への問題意識をふまえて、城下町の建設とそのプランの妥当性からその変容について、従来の研究の成果をふまえて、今後の展望もふまえて若干の考察をおこないたい。

日本列島は災害列島といっても過言ではなく、主要都市の起源は城下町と考えられるが、地震・津波・洪水などの災害を受けていない都市はないといってもよい。木村礎・藤野保・村上直の『藩史大辞典』（全8巻）には全国にある城郭と城下の藩史略年表が付されているが「社会（文化を含む）・経済」の項を紐解くと火山噴火、火災、米騒動・大雨・洪水などが列記されている⁷⁾。このなかで火災については、城郭ないしは城下にしても家屋が木造であるのでどこにでもおこりうる。他の自然災害とは区別する必要があるだろう。いずれにせよ、いわゆる近世は諸所で自然災害の「災害とたたかう大名たち」（藤田：2021）の姿が見られることになる。

II 城下町の建設

慶長から寛永年間にかけて、全国規模で城郭やその城下が形成された。近世城下町の誕生である。三重県の近世城下町などの研究で成果をあげている藤田（2019）の考えをまとめたものである⁸⁾。

一般的に幕府から領地を安堵された大名はそれぞれの封地に入国し、それまでの戦国期や織豊系城郭ないしは城下を変化させて継承するか、ないしは移転することになる。場合によっては、数万人におよぶ家中を引き連れて新たな藩の本拠地である城下町に集住させ、領国の経済の中心地としての機能を整備していくことになる。そのためには当然、旧来の中世都市があったとしても大規模に改造していくことが必要であった。いわゆる藩の誕生である。譜代大名では幕閣の移動などにより転封を伴い、当然のことながら、そのたびに若干の城郭や城下、藩領の手直しが必要となってきた⁹⁾。ただし、享保（1716～1736）の頃から転封件数は激減することになる。全国的に譜代大名の藩領は確定されていくが、三河国のように幕閣が増加する場合はやや遅れることになる¹⁰⁾。

多くの大名家では、旧来の城郭などの歴史的な核があった場所に入封したのちに、新たな城郭を普請して藩庁として、城下を整備する（藤田 2021）。伊勢津や伊賀上野のように立地する場所はずえに城郭と城郭を近世的に刷新していくことになった。第1表に主要な城郭と城下の移転状況を示した。注目すべきは、各大名家が規模の拡大により、それまでの城郭や城下では手狭となったことと、軍事優先の立地のため、洪水等の自然災害に見舞われ移動をやむなくされたことが移転の理由の上位にあげられる¹¹⁾。

慶長期から寛永期にかけて藩庁機能を備えた城郭の位置は定まり、慶長20年／元和元年（1615.9改元）の一国一城令や武家諸法度の公布以後、沼津など新規に築城される城郭や城下は40前後しかない（藤田 2021）。数は少ないが全くないわけではない。慶長期には、居城築城の

表 1 城下の移転

国名	城郭名	移転元の城郭	移転年次	移動要因
陸奥	弘前	大浦	慶長 8 年（1603）	家臣団の城下集中
	盛岡	福岡	慶長 3 年（1598）	交通（水運）の要衝
	仙台	岩出山	慶長 5 年（1600）	領内の中心への移動
	相馬中村	小高	慶長 3 年（1598）	本領復帰
出羽	鶴岡	尾浦	元和 9 年（1623）	
	新庄	真室	寛永 2 年（1625）	家臣団の編成
常陸国	水戸	太田		
上野国	高崎	箕輪	慶長 3 年（1598）	
越後国	長岡	蔵王堂	元和 3 年（1617）	信濃川による浸食
	高田	福島や春日山	慶長 19 年（1614）	家中人口の増加
三河	拳母（童子山）	拳母（桜城）	安永 9 年（1780）	洪水
尾張	名古屋	清州	慶長 15 年（1610）	洪水
美濃	加納	岐阜	慶長 6 年（1601）	関ヶ原戦い後、名古屋藩領陣屋
若狭	小浜	御瀬山		
近江	彦根	佐和山	慶長 8 年（1603）	敗戦処理
	水口	水口岡山	天和 2 年（1682）	街道筋への移動
	膳所	大津	慶長 6 年（1601）	要害の地への移動
山城	伏見木幡	伏見指月	慶長 3 年（1598）	地震
	淀	淀古城	元和 9 年（1623）	伏見廃城後の建設
丹波	篠山	八上	慶長 14 年（1609）	
丹後	宮津	田辺	天正 8 年（1580）	一国一城令
播磨	明石	船上	元和 4 年（1618）	幕府の戦略上の要地
但馬	出石	有子山	文禄 4 年（1595）	家中屋敷の確保
出雲	松江	月山富田	慶長 8 年（1603）	家中屋敷の確保
備後	福山	神辺	元和 5 年（1619）	
安芸	広島	吉田郡山	天正 19 年（1591）	
淡路	洲本	由良		
伊予	今治	国分山	慶長 7 年（1602）	
	松山	松前	慶長 8 年（1603）	洪水
	大洲	洲本からの移転	元和 3 年（1617）	転封
土佐	高知	浦戸	慶長 8 年（1603）	
筑前	福岡	名島	慶長 6 年（1601）	後背地の狭さ
豊後	佐伯	牟礼	慶長 7 年（1602）	
肥前	佐賀	蓮池	慶長 14 年（1609）	
	島原	日野江	元和 4 年（1618）	
日向	高鍋	櫛間	慶長 9 年（1604）	

藤田達生（2021）『災害とたたかう大名たち』角川選書、p.94 に加筆。

際、新規築城の許可を受け、居城地の候補地を申請して裁可を仰ぐなどとされた。一国一城令、武家諸法度の発布の元和以降は制度的に法令を軸に新規城郭の建設は原則禁止されていく¹²⁾。戦国後期以降、越前の朝倉館のような無数の城が築かれ、城下も形成されたが、それがそのまま近世に引き継がれることはない。たいていは新たに外郭のラインが決定されて惣構が築造され、侍屋敷地区・町屋・寺町の配置が決定された。さらに、慶長年間にも無数の城下町が建設されたが、藤田がいうように、残念ながらその詳細築造の過程が知られる事例は稀有である。近世城郭はその城下とともに設計されて、侍屋敷地区、町屋地区、寺町というふうにゾーニングが行われ

た¹³⁾。当然のことながら江戸期の軍学書などをみても、関心は江戸を中心とした防衛網の拠点であるそれぞれの城郭をどのように設計するかが焦点になってくる。

そして、当然のことながら城下町のプランの研究も立地も都市プランともいべきものも軍事的要素が優先されることになる。近くを流れる河川は堀として有効に活用され、舟運の機能も果たすことになる。しかしながら、それはもろ刃の剣であった。大河川を堀として利用すれば、確かに軍事的に有効であり、平和な時代には

は河川交通で経済上の利益を得ることができた。しかし、例えば川中島の戦いで有名な海津城を起源とする信州松代の城郭は、築城当初は『主図合結記』(図1)に描かれるように本丸の直近を千曲川が流れていた。山本勘助縄張りによるいわゆる「後堅固の城」であったが、このために寛保2年(1742)年の戌の満水の大洪水で城下も大きな被害を受け、千曲川の流路を1.5kmほど離れた現在の流路に改められた。『主図合結記』には「千曲川廣六十三間」と記されている。しかしながら、大土木工事の結果、真田家の統治する松代藩は莫大な借財に苦しめられ、経済復興のために恩田民親(空)の宝暦の財政改革へとつながっていくこととなる。幕末の諸藩が莫大な借金に苦しめられたのは、商品経済の浸透による藩主や家臣の奢侈に求められることが多い。しかし大地震や洪水、飢饉など断続的に襲ってくる復旧や防災のための資金も決して少額ではなかった、ことも事実である。

同様のことは伊予の松山城下の重信川の河道の付け替えなどにもみることができる。戦略上あるいは経済上重要な地点として選ばれた城郭所在地の土地はさまざまな自然条件をもち、さらにそれに付加される城下を自然の驚異から守るには藩政期にいろいろな工夫が必要となっていく。

沖積地に立地する長大な塁線上に築かれた多門櫓とそれを取り囲む幅広い巨大な水堀、さらには石垣の上には土塀がめぐらされ隅櫓が築かれ、場合によっては天守を聳え立たせているのが、徳川幕府が築いた城郭の最大の特徴である。それまでの豊臣系城郭は複雑な塁線と高低差を生かした迷路のような通路が配置されるのが普通であり、例えば三河の岡崎のように城下においても、城下に引き込まれた東海道は「二十七曲り」といわれるように防御のために屈折がほどこされていた。それに対して、徳川系の城郭はどここの城郭も同一構造という類似性を加藤(2021)は指摘している¹⁴⁾。これは徳川常備軍をフルに活用しようとしたものと理解される。標準化された中心部の城郭には幅広い水堀が掘られ、大規模な土塁や高石垣が築かれる。徳川軍であれば、どこに入城しても同一同等の戦闘が可能となるはずであった。城下についても、豊臣系城下町のT字路や遠見遮断など複雑な街路網から成ることが多いが、徳川系の城下にあっては城下の入り口部分の必要最低限にとどめられおり、町屋の中心街区では方形の直線が多用された。しかしなが

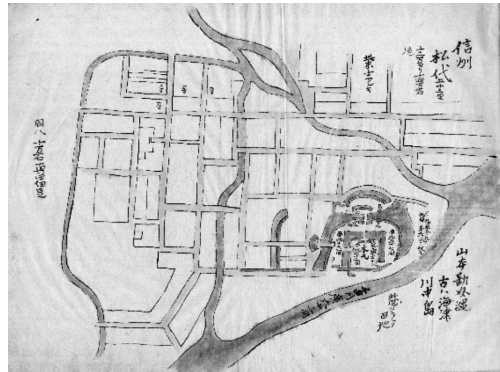


図1 信州松代(『主図合結記』)
筆者所蔵。文化年間9年(1812)
藤原道可模写と記されている。

ら、標準化された城下町は戦術上の地形の高低差などの巧みな配慮はあっても自然災害に対する配慮は足りなかったのではなかろう。城郭や城下をとりまく河川や沼沢地、軍事上に有利な地形であったある。近世城郭はその城下とともに設計されて、侍屋敷地区、町屋地区、寺町というふうに、矢守（1970）のいう「地域制」が施された¹⁵⁾。当然のことながら江戸期の軍学書などをみても、関心は江戸を中心とした防衛網、軍事的な内容に終始する。したがって、台風や地震などの自然の猛威の前にはかえって大きな被害をもたらすことはいうまでもない。

Ⅲ 城下町の自然災害

ところで、城郭や城下を襲う災害にはどのようなものがあつたであろうか。日本列島は災害列島といってもよい。火山噴火や火砕流、地震や台風、津波や高潮、洪水、土石流など城下町は多々の災害に見舞われた。城郭の修築に際しては城郭が地震などにより建物が倒壊、破損を受けたり、石垣が崩れたりした場合、幕府の城郭統制政策である武家諸法度によって厳重に管理されていた。災害で天守はもちろんのこと、石垣の修築などについても、勝手に修築することは許されず、幕府への絵図面を添付したうえでの許可が必要であつた。しかしながら、これはあくまで城郭についての規定である。陣屋とよばれる準城主の居所についてはもちろんのこと、城主の城郭についても城下についてそれぞれの藩主の裁量にまかされていた、と考えられる。

延宝8年（1680）閏8月6日、静岡県浅羽庄（現袋井市浅羽地区）が江戸時代最大ともいわれる台風による大きな高潮に見舞われた¹⁶⁾。およそ3m近い高潮が伊奈備前守の築いた天然の砂丘堤防を利用した防潮堤を乗り越えて「男女千余人が水潮で溺れ死ぬ」¹⁷⁾と伝えられる。その時の藩主は本多越前守利長、5万石の譜代大名である。

高潮震災の4か月後、横須賀藩は浅羽庄全体を囲う防潮堤を建設した¹⁸⁾。堤の高さ5.5m、総延長14kmにおよぶ。もちろん、その労役は被災した農民によってなされた。もともと横須賀の城郭は武田勝頼支配下にあつた高天神城攻略のための兵站基地として築城された。そのため第2図にみるように、石垣は寺院でもちいられるような円形のものが利用されている。近世には、城下は遠州灘の船運の港町として発展した。侍屋敷は西側の低い海成段丘の高台に三層4階の天守を構える城郭を有し、城下は東側にラグーンに接する形で碁盤目状につくられ、今も古いたたずまいを残している（第3図）。近世には、5家の小大名が入封している。交通の要衝であり、戦略上も重要ながら防災上の配慮はあまりなされなかったといつてよい。高波は高台にある城内にさえも3m近い浸水があつたという。延宝年間の高波以後、本多氏は前述の浅羽大堤のほか、第4図のようなないざという時の避難所「水塚」ないしは「命山」とよばれる命塚がつくられた。それは第5図のような「平成の命山」や津波防潮堤や避難タワーとして現在に受け継がれている。ちなみに復興のための防潮堤の労働力の動員、過酷な年貢率の引き上げなど、本多氏はその時の対応のまずさを問われて2年後、改易となった¹⁹⁾。

ところで、城下は遠州灘が荒れた時の避難港、中継港としても重要視された。それが変更をな

されたのは、宝永地震の時に砂丘内のラグーンの地盤が隆起し、ひえあがったってしまったことである。その時の西尾氏の藩政期を通じて港湾機能の復帰が試みられるが、ついに港湾の機能回復にはいたらなかった。経済的な損失はいかばかりであったであろうか。以後、陸路の交通の要衝として復活がはかられた。

同様の例として、宝永4年(1707)10月4日、津波が豊後佐伯を襲っている¹⁸⁾。6代藩主毛利(森)^{たかやす}高慶の時である。石高2万石の外様のやはり小藩であるが、水軍を有し、海に近い浦方を拠点として城下町を経営し、財政はかなり潤沢であった。津波の直後、城下町全体を囲む防潮堤で囲っている。被災直後の17日後から着工し、わずか2か月で総延長4kmの防潮堤を完成させている¹⁹⁾。要は津波の後の防潮堤の建設によって総囲郭の城下町となった。囲郭ないしは惣構の中には侍屋敷地区を考えると、田中(2022)がいうように軍事的側面から派生した問題だけが惣郭形成の契機となるとは限らない。囲郭が軍事上の要因で形成されることはもちろんであるが、佐伯や遠州横須賀のように、自然災害から城下ないし藩領を守るという視点からつくられる場合がある。このことは三河国(現:愛知県)の西尾²⁰⁾についてもあてはまる¹⁹⁾。第6図のように西尾は譜代大名系の城下町であるが、2万石から3万石の石高の大名が多数入封している。寛永15年(1638)太田資宗の時代に惣構が企画される。3万5千石で下野国から入封した資宗は在封期間僅か6年ほどであったので、工事の完成を見ることなく、転封した。囲郭は正保二(1645)年、転封により交代した井伊直好が工事を受け継いで完成させている。正保城絵図などをみても城下町すべてを取り囲む総構えであり、周囲には土塁・水濠を巡らされ、五門が開かれていた。しかしながら、享保8(1723)年頃、主要通りの家々も百姓家造で店舗は少なく、したがって町通に入り口は設けず、南向きの日当たりを第一として家屋は建築された。明和元年(1764)、最後の藩主松平氏は山形から6万石の石高で入封した²¹⁾。侍屋敷の増設や城下の整備が行われているが、商家と百姓家の混住は解消されていない。ちなみに付近を流れる矢作川の旧流路は矢作古川とよばれている。西尾城下が直接矢作川に接することはないが矢作川と矢作古川の両河川に囲まれた軍事上絶好の位置することになった。同時に両河川にはさまれることになった西尾城下町は近世期再々の水害にあうことになる。

城郭・城下の移動が制限される以上、付近を流れる河川の河道を付け加えるか、あるいは城下町全体を惣囲で囲いこむのが一般的な方法であったと考えられる。総囲郭について囲郭は軍事上の理由だけで築造されたものではない、田中(2022)はと推論している。



第2図 遠州横須賀城本丸付近
(矢野撮影, 1998)



第3図 掛川市大須賀の町並み
(矢野撮影, 1998)



第4図 袋井市に残る命塚
(矢野撮影, 1998)



第5図 平成の命塚
(矢野撮影, 1998)

表2 三河国西尾城城主の変遷

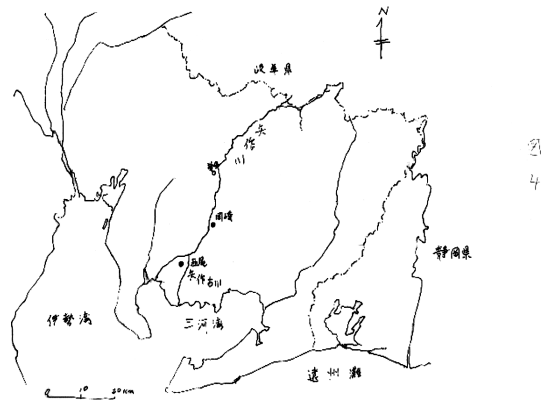
①	本多	永禄6年(1601)～元和7年	2万石
②	松平	元和3年(1617)～寛永2年	2万石
③	太田	寛永15(1638)年～正保2年	3万5千石
④	井伊	正保4年(1645)～寛文3年	3万5千石
⑤	増山	万治2(1659)年～寛文3年	2万石
⑥	土井	寛文3(1663)年～延享4年	2万3千石
⑦	三浦	延享4(1747)年～明和元年	2万3千石
⑧	松平	明和1(1764)年～廃藩置県	6万石

木村礎・藤野保・村上直編(1989)『藩史大辞典 第4巻 中部編Ⅱ
－東海』雄山閣出版、337-341により作成

Ⅳ 城下町の移転—三河国拳母の場合—

以上の例は、移動を伴わない城郭および城下の例である。城郭・城下の移転は前述のように幕府の統制政策によって厳しく管理されていたために安易に許容はされていない。にもかかわらず、新しく城下がつくられた興味深い事例として愛知県豊田市拳母をとりあげる²⁰⁾。

第6図は愛知県のほぼ中央部を流れる矢作川の流域分布図である。矢作川は信濃国(長野県)の大川入山を源流として、美濃国(岐阜県)を經由して、さらに拳母盆地



第6図 矢作川流域図

を貫流し、三河山地と碧海台地の間の狭隘な沖積平野を西尾付近で矢作古川を左岸に分流したのちに三河湾にそそぐ1級河川である。愛知県のほぼ中央部を貫流しているとみてよい。慶長年間の改修工事により寛文年間頃から舟運が発達した。流域には、東海道が通る岡崎をはじめとして、西尾・拳母(現在の豊田市)の城下町が形成され、藩政期には重要位置をしめていた²¹⁾。

矢作川流域の沖積平野は洪水常襲地帯であり、3城下のいずれも洪水の被害を受けている。前述の西尾でも紹介したように近世初期に下流部の西尾付近で河道が付け替えられている。従来の本流を矢作古川とっている。その矢作川のなかでも最上流部に位置する拳母は表2のように藩政期頻繁に洪水に襲われている。17世紀にも7回の洪水があり、三河国代官鳥山牛之助が延宝期(1673~81)に曲尺手堤を築いている。また、梅ヶ坪と拳母が対岸の寺部村との間で川除普請をめぐる水論を展開することになる。

のちに城下となる拳母の町の整備は慶長9年(1604)に当地に陣屋を在所おいた三宅家によってである(図5)。城下は大手町²²⁾・本町・東町・北町²³⁾・神明町・西町・竹生町の七町の町割りを実施され、いわゆる「衣七町」が成立する。その後入封した本多家により東新町・北新町が成立するが、それぞれ東町と竹生町に吸収されている。

ようするに拳母城のある矢作川右岸で、現高橋から久澄橋間に広がる各所に自然堤防が散見される沖積平野に城下は形成された。拳母城(桜城)の北・東・南の三方を囲んで町並が形成され、城の西側は田地となっている。町と結んで北に伊保道が延び、西には名古屋街道・池鯉鮒道が、南に大浜道、岡崎道が通ずる交通の要衝である。

寛延二年(1749)内藤氏入封によって初めて城が築かれたが、それ以前の慶長19年(1614)三宅氏の在所として形成される頃には陣屋である。竹生町・神明町・北町²⁴⁾・東町・本町・大手町²⁵⁾西町の七町が形成され、^{ころも}衣七町と称していたと言う。そして天和元年(1681)本多氏が藩

① 三宅家（武蔵国→三河国田原）譜代		
慶長4年（1604）9月～寛文4年（1664）5月9日		
※慶長4年～元和5年（1619）		
寛永13年（1636）5月16日～寛文4年（1664）の2期に分かれる。		
1万石	康貞・康信・康盛（1万2千石）・康勝	陣屋
以後、三河代官烏山牛之助精明支配		
② 本多家（陸奥国石川→遠江国相良へ）譜代		
天和1年（1681）9月15日～寛延2年（1749）2月6日		
1万石	本多忠利・忠次・忠央	陣屋
③ 内藤（上野国安中→）		
寛延2年～明治4年（1871）7月18日 廃藩置県		
政苗・学文・政峻・政成・政優・政文・文成（明治4年7月14日退任）		
2万石		城主

第7図 拳母領主変遷図

主として入封した時に新町ができて8町となった。本多氏の頃の陣屋（城地）の規模は、寛延二年の本多兵庫頭旧領の「陣屋并家中屋敷反別帳」（内藤家）によると、陣屋ならびに堀回り反別1町3反余、家中屋敷ならびに長屋・勘定所・米蔵の反別3町8反余である。しかし、内藤氏入部後の同3年の「三河国加茂郡拳母町新規取入城地丑より巳迄五カ年平均取米帳」（内藤家文書）によると新しく城地に組み込まれた分は32町余で、これらの土地田畑屋敷は、拝領高2万石のうち高外れとされ、不足分を加茂郡内より渡された。

このうち最後に入封する内藤家（第7図）を除いて、三宅家・本多家は無城大名であり、衣城跡に陣屋を設けて在所としている。『三河国拳母有来絵図』によれば、「西北端が突出したほぼ長形をしており、東に櫓形を有した表門、北側に裏門」というような形態であった。陣屋の周りには侍屋敷と明屋敷が描かれるが、侍屋敷が14区画に対して、明屋敷が9区画のみみられる。『新修豊田市史3通史編近世』では、ある段階で在所としていた家中の縮小を想定しているが、寺社奉行など幕府の役職が多かった大名家では任地の業務のために出払っていた可能性もありえる。いずれにしても積極的な町への働きかけは伝えられていない。延宝年間（1673-81）の『衣下町図』（別名延宝旧図豊田市蔵）には、町並の道幅3間半、一戸の間口は2.5-5間で城下への主な出入口には、6カ所の木戸が窓設けられている。城の用水として採養院川が城の周囲をめぐり矢作川に注がれていた。

この地籍図作成時には、館の遺構がそのまま原形を留めていた。また、第8図のように現在も石垣が残り、陣屋所在地は字旧城という地名が確認できることも注目にあたいする。

寛延2年（1749）上野国安中から2万石で入封した内藤正苗はそれまでの三宅家や本多家とは異なり城主格であった²⁶⁾。したがって、本格的な築城と城下の整備が必要となり、幕府より4000両が与えられた。家臣団が居住する城下町の誕生である。しかしながら、転封後前封地の安中よりも年貢収納が多かったはずにもかかわらず、知行高に比して収入は減少し、財政難をまねいていた。さらに翌年の寛延3年拳母藩は陣屋を描いた絵図と築城予定の（桜城）の縄張り絵



第8図 桜城
(令和4年3月17日 筆者撮影)



第9図 七洲城隅櫓 (復原)
(令和4年3月6日 筆者撮影)

図を幕府に提出した。幕府は申請を受理し、前述の4000両とともに築城に伴い潰される耕地を補填するための代地を下賜している。寛延4年、桜城築城工事が本格的にはじまった(第9図)。城郭は本多家が在所とした場所に建設することとなったが、築城工事遅々として進展しなかった。この時期に多発した洪水によるものとされる。しかしながら、じつは移転は洪水のほかにも支障があった。「芋八騒動」とよばれる百姓の強訴が原因で築城はいったん頓挫してしまう。宝暦2年(1752)飯野八兵衛を代表とした領民の集団が年貢の減免や桜城築城に伴う重い人夫役を免じる嘆願のために江戸へ出発した。三河国岡崎で不審に思った岡崎藩の役人に留められ、帰村が促され、拳母藩に注進されてしまう。しかし、拳母藩では家老川井内記が中心となって対応を検討された。

それでも一部の百姓たちは江戸の藩邸へ押しかけ強訴をおこなった。翌宝暦3年藩による厳しい吟味が行われ、死罪を含めた厳しい処分が行われている。一方、騒動の処理をうまくできなかったということで家老の川井内記も隠居及び蟄居に、藩の中樞にいた用人も厳重な処分を受けている²⁷⁾。いずれにしても幕府も安永9年(1780)城移築の許可を与え、その資金としてさらに2000両の拝借金を付与している。天明年間(1781~89)に第11図のように南西800mほどにあるそれまで洪水時に避難場所として使用されていた樹木台(七州城)への移転が決定した。

桜城のあった標高34.4mの地点から標高62.7mへの移動である。付近を流れる矢作川にある久澄橋の地点の標高が33mであるから桜城(第8図)のあった場所や現在市役所のある地点はわずか1.5mほどしかない。常識的考えても大雨があれば、すぐに冠水する場所であり、そのことはハザードマップでも確認することができる。それまで城下のあった町屋も本町・東町・南町の町人の一部も台地へ移住することとなった。移転して新たに建設された町を樹木町(上町)とよんでいる。現在、城郭のあった場所には豊田市美術館入口付近に写真6のような復原櫓が建てられている。ちなみに当地には旧豊田東高校の跡地に仮称豊田市博物館が2023年に部分開館、2024年4月に全面会館が予定されている。



第10図 拳母城（桜城）および拳母8町付近地籍図
（新修豊田市編さん専門委員会編（2021）『新修豊田市史3 通史編 近世』豊田市，126.）

第10図の地籍図（明治17年「拳母村地籍字分布地図」）を検討すると、陣屋と町屋の関係がわかる。

安永八年（1779）、旧城の南西あたる童子山へ移り、天明二年（1782）に七州城が完成した。築城中の宝暦七年（1757）に町屋地区の全町616軒のうち本町・東町・南町の93軒が樹木台だけが移転する。七州城完成後もこれらの町は旧町名のまま入組んで町並を形成していることが

表3 拳母災害史年表

和暦	西暦	藩主	石高	城下の動き	自然災害等
慶長9年	1604	三宅安貞	1万石	衣郷を七町とする	
慶長14年	1609				矢作川大洪水
元和5年	1619			三宅康信、伊勢国亀山へ転封	
寛永13年	1636	三宅康盛	1万2千石		
明暦1年	1655				矢作川大洪水、城下浸水
寛文4年	1664	三河国田原へ転封、幕領			
天和1年	1681	本多忠利入封	1万石		寺部村の堤防普請停止の訴え
元禄8年	1695				
元禄14年	1701				矢作川大洪水。被害甚大。
宝永2年	1705				矢作川大洪水。城下浸水。
享保16年	1731				矢作川大洪水。城下浸水。
寛延2年	1749	本多忠央遠江国相良へ転封			拳母村矢作川堤防完成
		上野国安中より内藤政苗入封	2万石		
寛延3年	1750			拳母城築城届幕府に提出	
宝暦2年	1752			飯野八兵衛騒動	
宝暦3年	1753			国家老川井内記塾居	
宝暦6年	1756			拳母城築城開始	
明和2年	1765				矢作川大洪水。城下浸水。
安永4年	1775				矢作川大洪水。
安永8年	1779			童子山城郭移転届を幕府に申請。	
天明2年	1782			拳母新城完成。移転。	当地方、大地震。
天明7年	1787				矢作川洪水、鞍が池堤防切れる。
享和2年	1802				矢作川大洪水。拳母大川通堤防決潰。
					矢作川大洪水。城下浸水。
文政5年	1822				矢作川大洪水。被害甚大。
天保3年	1832				矢作川大洪水。城下浸水。
天保6年	1835				城下130軒焼失。
弘化4年	1847				三河地方、大地震起こる。
安政1年	1854				拳母地方大地震。被害甚大。
慶應2年	1866				矢作川洪水。城内各所破損。
慶應4年	1868				矢作川増水。城下七町冠水。
明治2年	1869				矢作川大洪水により、工事中の渡場・堤防破損。

木村礎・藤野保・村上直編（1989）『藩史大辞典 第4巻 中部編 II－東海』雄山閣出版，277-280 により作成

表4 衣陣屋ないし拳母城、城下絵図リスト

	絵図名	所蔵
1	三河国拳母有絵図	豊田市
2	延宝年中衣下町絵図	豊田市
3	拳母御城地惣絵図	豊田市
4	三河国拳母城築絵図	豊田市郷土資料館
5	天明元年 10 月 23 日付老中連署状	内藤家文書
6	七州城縄張杭打図	豊田市郷土資料館
7	七州城縄張測量図	豊田市郷土資料館
8	七州城本丸御殿図	豊田市郷土資料館
9	子守明神祭礼之図	豊田市郷土資料館
10	旧拳母県城郭	富原文庫蔵陸軍省城絵図
11	七州城絵図	豊田市郷土資料館

新修豊田市史編さん専門委員会編（2021）『新修豊田市史通史編 近世』愛知県豊田市，北村和宏（2022）拳母城（七洲城）小考，豊田市研究第13号，53～75.

ら、新城下は町割が行われなかったと推定されている。しかしながら、原図は愛知県公文書館『三河国西加茂郡拳母村地籍字分全図』蔵より作成されているが、豊田市郷土資料館にも同様のものとみられる地籍図が存在する²⁸⁾。

第10図をみてもわかるように、長形の町割は規則的に配置され計画性を見出すことができる。拳母には表4にまとめたような絵図が残存している。それらを利用して絵図と考古学的な成果を交えた詳細な分析が北村（2022）によってなされている。他の譜代大名の藩に見られる天守の代用である御三階櫓も確認することができない。最終的にかなり経費を節約した新城であったようである。

V 結びにかえて

本稿では、災害列島ともいうべき日本列島において、軍事優先でプランされた城下町は必ずしも自然条件を考えたものではなかった。地震による津波、台風による高潮、河川の洪水による氾濫等の度に再々の被害をだすことになる。幕府の城郭統制政策は被害にあった城郭の修理にあっても絵図の提出をもとめ、もとの状態以上に防衛機能が増さないように厳重に管理した。そのような状況にありながら、少数であるが城郭の移転や新期に城郭の造成が実施された。その要因のひとつとして旧来の城郭や陣屋の立地する場所が災害に脆い場所であったことがあげられる。ここでは三河国（現愛知県）の矢作川流域を中心に中でも拳母（現豊田市）を例にとり考察した。

その結果は以下のようにまとめることができると思う。当初、城下町は軍事優先で防衛を第一に考え、その中で河川を利用したものが多い。特に譜代大名が入封した城下町では徳川軍団の城下町プランは標準化されたものであるのでその傾向は顕著である。元和偃武以降は水運のために利用されて、城下町は港湾機能も備えるものが多くなり、経済上も重要度も増すことになる。しかしながら、これはもろ刃の剣であり、海岸部であれば、津波や高潮など被害を受け、内陸部にあつては洪水の被害を受けることになる。

それに対処するため作られるのが河川の付け替えや大堤、命塚、惣郭である。従来、囲郭は小田原城のように軍事上の防衛施設の観点からとらえられてきたが、洪水から城郭を中心とした町ないしは付近の農地までも守る防災上も視点も必要である。徳川の平和の時代にあっても囲郭は形成されていくことになる。しかしながら、それでも対処で仕切れない場合は、三河国拳母のように、城郭の移転ということになるのであろう。もちろん、財政的に町全体を輪中みたいに堤防で囲うことができないことも十分ありうるし、そのためには領民に多大な負担をかけなければいけない場合もありうる。

防災は現代人にとっても切実な問題である。大堤防の建設、その補修、避難所の設置、災害を減災にするためのさまざまな対策が組まれていく。このことは何も近世の問題に限らず現代にも通じることではあるまいか。

注

- 1) 藤岡謙二郎は先史・古代から現代まで幅広く研究対象としたが、城下町についてもいくつかの論考や著作がある。藤岡によれば、城下町の概数は453とされ、歴史地理学の研究対象として重要な対象とした。
- 2) 西村睦夫は中心地の勢力圏の視点から藩領人口と城下町人口の関係について考察している。
- 3) 矢守一彦は城下町について歴史地理学の立場から幅広い分析をしている。『都市プランの研究』にみられるような城下町のプランに対して発展系列から整理し、現在もこれを利用して論じる研究は多い。晩年は堅町・横町から城下町をみる視点をとりいれている。秀吉・家康という天下統一者には自らの本拠またはこれに準ずる城下町は堅ブロックもしくは碁盤型の地割で、堅方向横町方向の町通りを主軸とすることが、〈王城〉としてよりふさわしいとする意識があったかも知れないとし、また、彼らの取り立てた大名の場合は、大城下でもためらいもなく横ブロック型の町割りが採用され、これをベースとする複軸構造となっている、としている。
- 4) 足利健亮は中近世都市研究の立場から御土居や淀、伏見などの研究をしている。堅町・横町の関係について矢守一彦との論争がある。
- 5) 金田章裕は古代・中世の村落について研究者であったが、近年は一般書などで城下町を多数分析し紹介している。
- 6) 藤田達夫には多数の藤堂高虎や津藩に関する労作があり、城下町のプランニング関するものも多い。
- 7) 『藩史大辞典』は膨大のデータを年表にまとめているものの執筆やそれぞれの地域の災害に対する認識のためか、精粗があることに注意しなければならない。
- 8) 藤田 (2019) をはじめとした研究は丹念な史料にもとづいた研究になっており敬服に値する。ただ津藩や藤堂高虎の在封した地域にもとづいているため、譜代大名の展開した城下町全体にもあてはめることができるのかについては検証が必要かもしれない。
- 9) 譜代大名の城下町には数家の大名家が入封することが多かった。その際、城郭・家臣の屋敷も大破している場合が多かったようである。
- 10) 尾張は親藩が入封し、大名数に変化しなかったが、三河は譜代大名が頻繁に入れ替わった。
- 11) 天下統一の時代であった織豊期は天下統一の時代であり何をおいても軍事優先であった。
- 12) 藤田達夫 (2021) は津城下町の武家地について検討し、家臣団の配置としては、城から遠ざかるにつれ、大身から軽輩へと一定の傾向が認められた。しかし、組 (軍隊内部の基礎単位) によるまとまりは、城代の藤堂仁左衛門組などの一部を除き、見事なほどバラバラに配置されていることが、判明している。ゾーニングのありかたにはどのような意識が働いていたのか、考えさせられる。
- 13) 加藤理文 (2021) 『家康と家臣団の城』角川選書。
- 14) 矢守 (1970) 『都市プランの研究』大明堂
- 15) 白峰 (1998)
- 16) 延宝の高潮については『百姓伝記』に詳述されている。横須賀本城の天主閣は3重にして6間に7間、石垣高さ3丈2尺に及ぶも地盤頗る低く洪水城郭を没す、とありそのすさまじは尋常ではない (『百姓伝記』)。
- 17) 本多利長は改易後、のちに出羽村山郡内に1万石が与えられて初代藩主となっている『土芥冠鑑記』には領地召し上げのあと行状がよくなった、という評価がなされている。
- 18) 慶長六 (1601) 年4月、番匠川が形成した佐伯湾に臨むデルタ地帯に毛利高政によって形成された。石高2万石の小藩であるが、毛利氏は城主格であり。列記とした城下町である。毛利氏が入封した佐伯には文禄二 (1593) 年まで大神姓佐伯氏の榎牟礼城があったが、内陸の山城で近世城郭としては不向きであったので、番匠川河口の標高140mの八幡山の山頂に天守をい置く城郭が築かれた。築城と並行して城郭の南東麓の塩屋村の干潟を埋め立てて侍屋敷と城下が建設された。

当初の城下は侍屋敷・商人・百姓などの混住がみられたようであるが、宝永二年および元文元年 (1736) の内町大火を機に、城下にあった全農家は中村に移転させられ、桜井屋敷地区と町人居住区の

明確化が図られた。侍屋敷は本町に給人と中小姓、鉄砲町に徒士および目付格が、下中町・下古市町・下中島町に足軽小頭と足軽が配された。一方、町人は上中町・上古市町・上中島町に配していることがわかる。各所には城下町特有の L 字路・T 字路などの街路が配されている。

「郷村仮名付帳」（佐伯藩政史料）

「文政九（1826）年御城下分見明細図絵」（佐伯市教育委員会）

屋敷数 190、坪数 6,027 坪、中川沿いの南北の道に沿う土井町

内野川の北側が内町で、内町横町を境に南が町屋、本町通以北に侍屋敷と善教寺・久成寺があり、城下北西入口に養賢寺がある。堀の南側の船頭町は番匠川沿いに町屋が並び、大日寺以北の内町川沿いに侍屋敷と潮谷寺が配置される。

宝永四（1707）年 10 月に佐伯地方を襲った地震により城下の堤防が崩壊、高波を受けて、大きな被害を受けた。藩主毛利高吉慶は復旧のため役夫総数 3 万 4 千人を使役して、枅形から蟹田にわたる 37 町 49 軒余の堤防（新規築堤 11 町 53 間）を同年末までに築いた、という。佐伯には膨大な史料が残されており代表的ものには以下のようなものがある。

文政九年（1826）御城下分見明細図絵（佐伯市教育委員会蔵）

『佐伯藩政資料』（佐伯市教育委員会）

『温故知新録』（佐伯市 山中氏保管）

『因尾村文書』（大分市 大分県立大分図書館所蔵）

『大分県史』近世編Ⅰ「大分県」昭和五八年

『佐伯市史』佐伯市 昭和四九年

- 19) 付近を流れる矢作川は愛知県のほぼ中央を流れ、三河湾にそそぐ。慶長 10 年（1605）の改修により、藤井（現在の安城市）から本流が分かれて南西の入江に注がれるようになっている。慶長 10 年（1605）現在の新しい水路が開かれるまでは、矢作川の下流地域は頻繁に洪水に見舞われていた。従来流れていた河川これを矢作古川^{やはきふるかわ}とよんでいる。
- 20) 『富原文庫蔵陸軍省城絵図』所収の絵図には裏面に「全部揃不明」とあるだけで城郭名の記載はないが、西尾城のなわばりである、としている。城内全体に水堀・土塁・要所には石垣を巡らし、本丸東に三重櫓、残り三方に二重櫓、姫丸との間に埋門、二の丸北に三重櫓、東に二重櫓、姫丸南に二重櫓が残される。
- 21) この時期衣（拳母）は幕領期であった。幕領期には、陣屋は周囲の堀も埋め立てられたらしい。現豊田市域に含まれる付近には、慶長 18 年（1613）徳川家康から尾張藩附属を命じられた渡辺守綱の陣屋がある。加茂郡内に 5000 石を領し、尾張国内と近江・武蔵の知行地をあわせると 1 万 4000 石となる。守綱が陣屋を構えて在所とした寺部は戦国時代に鈴木家が城郭を構えていた場所である。付近で矢作川は市木川と合流し、大きく湾曲する。対岸の衣（拳母）と向かい合っている。陣屋は鈴木時代の寺部城跡を整備したもので堀と櫓を備えた本郭・二郭・家中屋敷の建つ三の郭からなり、「寺部城屋敷」・「寺部御城」とよばれていた。陣屋の東側には家中屋敷が配され、その南方には町人屋敷が配置されている（『愛知県史 通史編 5 近世 2』p.68）。現在、寺部城跡はこうえん家老屋敷跡の長屋門が残り、小城下町の趣がある。
- 22) 後に南町と改称
- 23) のちに中町と改称
- 24) のちの中町
- 25) のちの南町
- 26) 江戸時代の格式のひとつに国主（国持大名）・準国主・城主・城主格・無城（陣屋）があった。元和元年（1615）の一国一城令によって主城以外が破却された後、取り立てられた大名家や分地大名が多数あらわれ、与えるべき城地が不足した。そこで若年寄などを努め幕政に貢献のあった家や旧家、名族を「城主格」として処遇することになる。幕末の慶應 3 年（1867）の時点で 19 家あったといわれる。無城大名が城主格に昇進した場合、国元の陣屋を城に転換することは許されず、城門の構築のみが許され

た。領地の居所を表す場合も城主の場合は居城であるが、無城大名の場合は在所のままであった。しかしながら、譜代大名の場合は転封を伴う場合も多く、封地との兼ね合いで無城であったものが城主となったり、城主格となったりしている。拳母に最後に入封した内藤家は泉に在封した時代は城主格であったが、安中在封時代に城主となっている。それぞれの町がいわゆる城下町となるか、陣屋所在地となるかも在封したそれぞれの大名の家格が影響する。

27) 『愛知県史 通史編 5 近世 2』 p.74

28) 『愛知県史 通史編 5 近世 2』 p.167

29) 富原道晴編著 (2017) 『富原文庫蔵陸軍省城絵図－明治五年の全国城郭存廃調査記録』では、愛知県豊田市の七洲城絵図はつぎのように解説されている。裏面に「旧拳母県城郭」とあり、図籍掛改朱印があるとし、七洲城の全体図はこれまで見られることはなく、丘陵上の本丸御殿後ろに「元拳母県城郭」と記され、隅櫓・お多門・搦手門があり、本丸の規模が判明する。丘陵東南に町口門、北部に西門、南部に池竣門があり、本丸との通路が表示されている。p.126-127

文献

愛知県史編さん委員会編 (2019) 『愛知県史 通史編 4 近世 1』 愛知県.

足利健亮 (1984) 『中近世都市の歴史地理』 地人書房.

岡山藩研究会 (2000) 『藩世界の意識と関係』 岩田書院.

小野均 (1928) 『近世城下町の研究』 至文堂.

加藤理文 (2021) 『家康と家臣団の城』 角川選書.

北村和宏 (2022) 拳母城 (七洲城) 小考, 豊田市研究第 13 号, 53-75.

金田章裕 (2020) 『地形と日本人－私たちはどこに暮らしてきたか』 日経プレミアシリーズ.

金田章裕 (2021) 『地形で読む日本－都・城・町はなぜそこにできたのか』 日経プレミアシリーズ.

窪田重治 (1992) 『城下町松山と近郊の変貌』 青葉図書.

白峰旬 (2003) 『豊臣の城・徳川の城』 校倉書房.

新修豊田市編さん専門委員会編 (2021) 『新修豊田市史 3 通史編 近世』 豊田市.

田中詢也 (2022) 織田政権における「惣構」の特徴と展開－織田信長とその家臣に関連する事例を中心に－, 史泉第 135 号, 1-21.

富原道晴編著 (2017) 『富原文庫蔵陸軍省城絵図－明治五年の全国城郭存廃調査記録』 戎光祥出版.

豊田市教育委員会・豊田市古絵図調査研究会編 (1998) 『豊田の古絵図－拳母藩領近世絵図集大成－』 豊田市.

中井均 (2021) 『秀吉と家臣団の城』 角川選書.

野間晴雄・山近博義・矢野司郎編 (2020) 『地図でみる城下町』 海青社.

藤岡謙二郎 (1957) 『日本歴史地理序説』 塙書房.

藤田達生 (2006) 『江戸時代の設計者－異能の武将・藤堂高虎』 講談社現代新書.

藤田達生 (2021) 『災害とたたかう大名たち』 角川選書.

山下琢巳 (2015) 『水害常襲地域の近世～近代－天竜川下流域の地域構造』 古今書院.

山下琢巳 (2021) 吉越昭久著『近世福山城町の歴史災害』 書評, 歴史地理学 64-4, 25-28.

矢守一彦 (1958) 近世城下町プランの発展類型: 序説, 『史林』 史学研究会 41, 561-580.

矢守一彦 (1970) 『都市プランの研究』 大明堂.

矢守一彦 (1972) 『城下町研究ノート』 古今書院.

吉越昭久 (2020) 『近世福山城下町の歴史災害』 文理閣.

Crisis Management and Flood Control in Castle Towns

YANO Shiro*

The construction and maintenance of an early modern castle towns were historical events that transformed the landscape of a community on an unprecedented scale. The most significant differences between medieval castle towns of the previous era and early modern castle towns were that early modern castle towns were designed as an integrated part of the castle and zoned into samurai districts, townspeople towns, and temple towns. Another difference is that multiple feudal lords with different Kokudaka (a system for determining land value in the Edo period) entered the same castle town where Fudai feudal lords settled. The fact that a number of feudal lords moved into a castle town under the Bakugan system meant that the town had to have a network of streets that were easy to use for all of the lords, who were all different in Kokudaka, and it was necessary to develop infrastructure such as water supply and sewage systems. However, the region was vulnerable to natural disasters because of the priority given to military affairs and the centrality of the fiefdom above all else. This paper examines the early modern castle town of Koromo in Mikawa Province, which was promoted from a camp to a castle town and had to be altered or relocated due to natural disasters. The Yahagigawa River flowed through the eastern part of the castle area of Koromo and was, therefore, subject to recurrent flooding. In 1749, when the Naito clan, feudal lord of the castle, entered Koromo, the castle, and the samurai residences were relocated from the adjacent area of the Machiya (townhouses), which was on lower terrain, to Dojiyama, 0.8 km west-southwest of the castle, due to flooding. At that time, some of the Machiya (townhouses) in the Miyake clan's Jinyamachi period were also relocated to a wooded area connected to the castle grounds.

Key words: early modern castle town, transfer of feudal loads, river channel change, natural disaster, alteration of castle town, castle relocation, Koromo

*Osaka International Junior and High School E-mail : hungry602@icloud.com